

「余暇文学」の探求

— ワーク・ライフ・バランスの視点から —

米 村 恵 子*

要 約

近年、環境については、文学研究者が文学研究として環境の視点から作品を読む「環境文学」という領域が認識され、研究が活発化している。文学研究を通して、社会が孕む倫理的な問題に積極的にかかわり、社会全体の意識を刺激し、新たな意識を形成し、警鐘を鳴らし、社会的な課題の解決に文学ならではの役割を果たそうという意欲的な試みである。余暇についても、「環境文学」のように、文学研究者が余暇をめぐる今日的課題を意識し余暇に焦点を当てて作品を読み解く「余暇文学」の試みは成立しうるのではないか。環境同様、余暇研究と文学研究の意識的なクロスオーバーが活発化すれば、それは、余暇研究にも文学作品の読みに、より豊かな膨らみや奥行きをもたらすのではないだろうか。

本稿の主題はこうした問題意識に立って設定されたもので、複数の小説を通して、生活や人生における余暇の意味や価値がどのように表現され位置づけられているかを読み解き、余暇をめぐる今日的課題解決の一助とすることの有効性・可能性を探求する試みである。その際、ここでは特にワーク・ライフ・バランスという、近年急速に注目されている考え方を視点に据えた。本稿は、ワーク・ライフ・バランスの視点を有した文学研究者の論文と、小説におけるワーク・ライフ・バランスに関連する記述を探索し、内容に対し若干の考察を加えつつ、「余暇文学」の可能性を模索したものである。

キーワード：ワーク・ライフ・バランス、環境文学、余暇文学

はじめに

本稿の主題は、小説で余暇を読むことである。余暇に小説を読むのではない。複数の小説を通して、生活や人生における余暇の意味や価値がどのように表現され位置づけられているかを読み解き、作品の文脈に沿って余暇実態や余暇観を整理することによって、余暇研究の一助とすることが目的である。しかしながら、現時点でその具体的な方法は未整備であり、取り上げる作品もごく少数の限られたものに過ぎない。本稿は、自らの問題意識と方向性を整理するための研究メモとでもいう

べきものである。

後でふれるように、近年、環境については、文学研究者が文学研究として環境の視点から作品を読む「環境文学」という領域が認識され研究が活発化して、内外に学会も設立されている。余暇についても、「環境文学」のように、文学研究者が余暇に焦点を当てて作品を読み解く試みは可能ではないだろうか。

余暇研究者が余暇研究の理論補強上の根拠や事例として、あるいは素材・ツールとして便宜的に文学作品を取り上げるというケースはこれまでも間々存在する。たとえば、夏目漱石の『吾輩は猫である』には、海水浴の起源や、当時の人々の過剰な健康志向・海水浴ブームを猫の目で皮肉った大部の記述が登場し、余暇・リゾート研究ではし

2007年11月30日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 社会学

ばしば援用されてきた。ミヒャエル・エンデの『モモ』は余暇研究のバイブルのようになっていく。しかし、それに引き換え、文学研究者の側から文学研究として余暇に着目した研究は多くないように思われる。環境同様、余暇研究と文学研究の意識的なクロスオーバーが活発化すれば、それは、余暇研究にも文学作品の読みに、より豊かな膨らみや奥行きをもたらすのではないだろうか。

本稿では、作品によって、著者によって、また、書かれた時代背景、物語の舞台、登場人物の社会的な立場等々によって、余暇の中身や扱われ方、生活における余暇の位置づけ、人生や生涯における余暇の意味にどのような差異が存在するかについて、特に、ここ数年急速に注目度が高まりつつあるワーク・ライフ・バランスの視点から検討することとする。

ワーク・ライフ・バランスは、その用語が示す通り、仕事を前提としている。余暇の定義はさまざまにあるが、20世紀を代表する余暇社会学者であり日本の余暇研究や余暇政策に多大な影響を与えたジョフリ・デュマズディエは、『レジャー社会学』のなかで、余暇は産業社会独自の産物で労働を前提としており、労働抜きには存在し得ないという立場を明確に表明している。筆者の関心も、余暇は働く大人の問題であるとするところにあり、従って、たとえば子どもの余暇という概念に対しては懐疑的である。ただし、ここでいう労働や仕事は、賃金労働のような経済的対価のあるもののみを指すのではない。通常はライフの領域とされる家事・育児・介護なども義務拘束的活動の側面ではワークである。こうした社会的存在としての大人の人間に期待される社会的義務、社会参加の形態である多様な活動を包含するものであり、しかも今現在働いているかどうかではなく、その人の人生における仕事・労働との関わりの有りようをいうのである。個々人について言えば、定年退職後のように仕事から離れているとしても、ライフヒストリーのなかで仕事・労働と関わりを持つならば、その過程のなかから過去・現在・未来の余暇は規定されていくのである。こうした余暇観を有して小説で余暇を読む場合、ワーク・ラ

イフ・バランスの視点に関心を寄せるのは自然の成り行きであろう。

なお、ここで取り上げる作品はいずれも、余暇研究にとって有益な多くの示唆を汲み取ることが可能であると期待される機会の多い作品であり、働く大人を登場人物とする著名作品であるが、それでもその中からのほぼ無作為抽出に近く、特別の意味を有するものではない。

1. ワーク・ライフ・バランスについて

(1) 白書における位置づけ

2007年は、わが国の白書における「ワーク・ライフ・バランス元年」とでもいうべき様相であった。『労働経済白書』『国民生活白書』『男女共同参画白書』『少子化社会白書』『高齢社会白書』などが相次いで基調に扱い、章や節の見出しにもこの語を使用するなど、前年までには見られなかった新たな潮流が顕著になったのである。

また、男女共同参画会議に「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する専門調査会」が設置され、2007年7月には報告書を公にした。そこでは、ワーク・ライフ・バランスを“仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動について、自らが希望するバランスで展開できる状態”と定義し、その推進が、少子高齢化と人口減少が進む中で、個人・企業や組織・社会全体の持続可能性を高めた“多様性を尊重した活力ある社会”を構築するために有効であると位置づけている。

ここに至ってワーク・ライフ・バランスは名実ともに市民権を獲得したといえよう。

とはいえ、この用語は今日ひろく一般市民の間で身近に使用され、十分理解されているというわけではない。白書をはじめとして、国や自治体、労働組合などの研究会や審議会などの公的資料には頻繁に登場するが、その際にもほぼ例外なく「仕事と生活の調和」という文言が併記されたり、括弧書きされたりしている。表記についても「ワークライフバランス」と一語で記される一方、「ワーク・ライフ・バランス」と単語ごとに区切って表

記される場合も多い。国の白書でも、表記や定義は微妙に異なっている。

本稿では、2000年代初頭、この考えが日本に体系的に紹介され始めた時期に筆者が会って見慣れている表記に従い「ワーク・ライフ・バランス」を用いることとする。

平成19年（2007年）版白書における使用例を以下に示す。

① 『高齢社会白書』

ここでは、高齢者の生活の充実や生きがいの高揚にむけた基本姿勢として用いられており、アンバランスを是正するため、むしろ仕事機会の拡充を指摘している点に特徴がある。

“高齢者の意欲と能力を職場で活用することで「世代を通じたワークライフバランス」を実現するための取組として、企業については、まず高齢者は意欲・体力が低下して戦力として使えないという先入観を変えていくことが求められ、労働者には、若い時期から高齢期の就労が可能となるように準備に取り組むことが求められる。また、有償ボランティアのような生きがいを重視する就労形態も重要である。さらに、ワークライフバランスの実現は高齢者にとっても考えるべき問題であり、より多くの就業を希望する高齢者にとっての「ワークライフバランスの実現」は、より「ワーク」に向けられる時間を増やす方向で取り組まることが必要である。高齢期を活力あるものとしていくためには、若い時期から準備しておくことが有効であるものが少なくない。例えば50代になったら自分の「高齢期についての人生プラン」を考えてみるのも有益ではないか。また、こうしたプランづくりに取り組むためには、自分の人生全体で、若い時期から高齢期まで全体を見渡しての「ワークライフバランス」を考えることも必要”と述べられている。

② 『労働経済白書』

副題に「ワークライフバランスと雇用システム」を採用。

仕事以外の生活領域との均衡を実現させる労働

環境整備の必要性を説くとともに、実現がもたらす個人・企業双方のメリットを強調している。

第2章第4節「ワークライフバランスの各国の動向」および第3章第3節「ワークライフバランスと雇用システムの展望」の2カ所でタイトルに採用されており、「ワークライフバランスの各国の動向」では、例えば2000年3月から5年以内を目処にイギリスのブレア政権下でワークライフバランスキャンペーンが実施されたことや「ワークライフバランスのための事業主連盟」が設立され政府と一体になった取り組みが行われた事例を紹介している。

ここでは、ワークライフバランスは、“年齢、人種、性別に関わらず誰もが仕事とそれ以外の責任・欲求とをうまく調和させられるような生活リズムを見つけられるように働き方を調整すること”と説明されており、個人にも企業にもメリットのある新しい働き方の提案という意味合いが強く打ち出されている。語られているメリットは次のとおりである。

- i. 労働力を最大限活用できる
- ii. 社員の意欲の向上、ストレスの軽減
- iii. 高齢者や育児・介護の担い手を含む広範な人材の採用可能性
- iv. 常習欠席者の減少と生産性の向上
- v. 優秀な社員の定着

③ 『男女共同参画白書』

第3章「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」のタイトルに採用。その中の「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）についての希望と現実」の項において男女共同参画会議少子化と男女共同参画に関する専門調査会の「少子化と男女共同参画に関する意識調査（男女の働き方とワーク・ライフ・バランス）」（2006年）を紹介し、“ワーク・ライフ・バランスの希望と現実の差は大きい。特に男性では、独身、既婚ともに「仕事優先」の希望と現実の差が大きい”などの分析を行っている。

このように、各白書の性格により、ワーク・ラ

イフ・バランスの理解や力点には若干の違いが見られるものの、いずれの白書でも、ワーク・ライフ・バランスは、一種の社会ビジョン、めざすべき方向、あるべき姿、目標としているように読める。現在の日本社会では見果てぬ夢であり未実現の願望であるが、目指す方向としては疑う余地のない正道であって、必ずや近い将来実現されるべきものであるというトーンである。これは公式な白書というアウトプットが持つ固有の性格を反映したものともいえるが、この点は、むしろより強い戦略的意図を持って企業主導で具体的メニューの提示実行により普及させていった欧米とは若干異なる印象である。

(2) ワーク・ライフ・バランスの源流

この用語の登場と考え方の普及は欧米が先行している。

欧米先進国において、1970年代から始まった女性の旺盛な社会進出に伴い、1980年代に入って切実となった働く女性のワーク・ファミリー・バランスにその原点を見る考え方、つまり仕事と家庭の両立支援を端緒とするのが一般的である。ここでいう社会進出とは、単に代替性のある労働力として働く女性が増えたということだけでなく、責任ある地位や立場で労働現場の主力として仕事に従事する女性が増えたことをも意味している。具体的には、ワーク・ファミリー・バランスの初期施策は働く母親のつなぎ止め策であったため、保育サポートが中心であった。

一昔前のM字曲線は過去のものとなり、働くことを中断したり放棄したりすることなく、責任ある仕事をしながら、家庭を持ち、家事をこなし、子どもを育て、高齢者の介護もし、さらに地域社会におけるボランティアな活動、趣味のライフワークや将来に向けた学習などにも意欲と行動力を持ち続けられるよう、企業も行政も支援しようという機運が起こり、社会を席卷するようになったのである。それは、企業社会側の要請でもあった。

低成長下で、企業は少数精鋭による効率的な業務遂行を加速させ、男女の別なく企業にとって優秀な人材が持てる能力を最大限発揮して業務に取

り組めるよう、さまざまな支援に着手する。その過程で、ワークとバランスさせる領域はファミリーだけでなく、ライフ全般となっていくのは自然の成り行きであろう。

アメリカの場合は80年代半ばに様々な企業で自然発生的に始まったワーク・ファミリー・バランスが功を奏して企業の業績に結びつくようになると、取り組み企業の増加と共に、対象者や対応策も拡大していく。当初は働く女性とりわけ働く母親に主眼が置かれていた支援策から、やがて男女の別なくすべての働き手を対象としたワーク・ライフ・バランスのための方策へと変容していったのである。イギリスでは、民間の動きを国がサポートする形で2000年からはワークライフバランスキャンペーンも実施される。

こうした流れは、景気回復傾向が見られるようになると労働需給状況の逼迫でさらに安定的となったが、欧米で既に実践されている具体的な支援策は、仕事と私生活の共存を実現するため驚くほど多岐にわたっている。

(3) 日本での登場

ワーク・ライフ・バランスを日本へ体系的に紹介する役割を果たしたといわれている『会社人間が会社をつぶす——ワーク・ライフ・バランスの提案』（バク・ジョアン・スックチャ著、朝日新聞社）が出版されたのは2002年7月、労働関連の専門研究誌にこのテーマが特集として登場している古い例は『JMA マネジメントレビュー』2001年8月号における「ワーク／ライフバランスで築く新人事戦略」である。

2007年11月19日現在の国内雑誌記事検索（専門研究誌を含む）では、ワーク・ライフ・バランス（ワークライフバランスを含む）で363件がヒットしたが、その内訳は2007年155件、2006年151件、2005年26件、2004年7件、2003年1件、2002年10件、2001年13件で、2006年から2007年にかけて急速に関心が高まったものであることがわかる。2001年に海外の先進事例として紹介され若干の注目を集めたものの、その後はむしろ低調であったものが、2006年から一

躍時代の表舞台に登場した感がある。突然の登場の背景には、本格的な少子高齢社会の到来に対する痛切な危機感、労働力の需給構造の変化、そしてとりわけ“2007年問題（団塊世代の大量定年退職問題）”への対応に向けた処方箋探しが横たわっているものと考えられる。

前掲書の前書きによれば、執筆当時（2002年4月）、日本ではこの語の認知度はきわめて低いが、英語によるキーワード検索では10万件近いヒットがある注目のビジネス用語で、直訳すると「仕事と生活の両立」、意識では「仕事と個人の私生活に関する新しい考え方・取り組み」であり、著者は1999年にアメリカでこの言葉と出会ったという。

日本では、貿易摩擦に端を発した日本人の働きすぎ批判、ウサギ小屋に住む働き蜂批判への対応もあって1980年代半ばから展開された国民的キャンペーン「ゆとり社会構想（労働時間短縮と休日休暇の拡充により、生涯にわたる生活の質の充実可能な社会の実現をめざす）」施策に始まり、やがて仕事生活と個人生活の両立を可能にする各種休暇制度の整備、そして育児支援を重視したファミリー・フレンドリー（仕事と介護・育児の両立支援）企業などの取り組みが実施されていた。育児休業や介護休業の法制化もこの流れのなかから生まれたものである。

1985年に男女雇用機会均等法が成立し、男女共同参画社会が用語として定着する中、ここ2〜3年で「ワーク・ライフ・バランス」の注目度は画期的に高まり、研究誌への登場も激増、前述のとおり各種白書の基調となるに至っている。

これまで労働研究や余暇研究の分野では、重視度・充実度・生活の質等を考える際の枠組みとして、仕事と余暇を二項対立の相対概念として捉え（例：仕事重視か余暇重視か）、また、生活領域としては仕事生活・余暇生活・家庭生活・地域生活という4分野の相関を見ることが定着しており、時系列調査も多く行なわれている。そうした中でワーク・ライフ・バランスの新規性は、仕事と仕事以外の多様な領域という二項対立を認めつつも、対立・侵食・競合する面ではなく、柔軟に交流し

相互に補完しあうことによって、相乗効果による好循環が生まれ、双方がともにより高次の充足を実現させるという期待に信を置く発想と言えるのではないだろうか。

ところで、今提案され好意的に迎え入れられようとしているワーク・ライフ・バランスという考え方は、上述の書の著者が述べていたように、日本においても過去にはない新しい考え方なのであろうか。働く大人たちは未実現の願望としてでもこれまでこのような考え方に興味関心を持つことはなかったのだろうか。あるいはかつては存在したが、高度経済成長競争のなかで一時期背後に押しやられていたライフスタイルの復権であるということはないのだろうか。また、バランスと感じる状況に普遍性はあるのだろうか。

文学作品（小説）を手がかりにして、日本人・日本社会のワーク・ライフ・バランス観（感）の一端を探ること、その準備に向けた小さな一歩、それが本稿の目的である。

2. 「環境文学」について

1992年、アメリカで文学・環境学会が設立され、翌1993年には日本でも現在の文学・環境学会のもととなる組織が立ち上げられて、「環境文学」というジャンルが認知されるようになってきた。環境の視点から文学を読み直す動きが活発化しているという。

ここで特筆すべきことは、「環境文学」においては環境の研究者たちが自らの問題意識に沿って文学をテキストにするのではなく、文学研究の側が環境という新しい目線で文学に新たな光を与えようとしていることである。環境を視野に入れた新しい文学研究の萌芽といえよう。

もともとアメリカやイギリスでは人と自然のかかわりを主題とした文学表現に対しては、ネイチャーライティング、自然文学、田園（パストラル）文学などの分野が存在していた。

文学・環境学会編による『たのしく読めるネイチャーライティング』の冒頭で、編者は次のように記しているが、定義自体についても学会会員間

で議論が深められている途上であるという。

“最も基本的な定義に従えば、ネイチャーライティングとは、自然と人間とのかかわりを省察する一人称形式によるノンフィクションを指している。また特に環境文学と言う場合には、ノンフィクションから詩や小説や演劇まで、自然がクローズアップされるすべての文学を含むことになる。”

もともと個人の実体験に根ざしたノンフィクション中心に存在していた領域に対して、「環境文学」では新たにすべての文学的創作活動の成果にまで範囲を広げているのである。対象の拡大は、現代の創作活動がフィクションのようなノンフィクションや、まるでノンフィクションのような小説がない交ぜになって境界もどんどん曖昧になってきている状況下では時代の流れともいえるが、フィクションゆえにより痛切に自然の大切さを訴えかける力を有する場合もあり、今日の傾向は歓迎すべきものである。

こうした「環境文学」に倣って「余暇文学」というものが考えられるなら、むしろ、フィクション（小説）に描かれた余暇に焦点を当てたい。

アメリカにおいては1980年代から目立つようになったエコクリティシズムと呼ばれる方法があり、それは「広く文学と自然環境とのかかわりを考察し、文学研究の立場から深刻化する環境破壊への提言を模索する試み」と捉えられている。文学研究の枠を超えて、自然破壊や環境問題に向き合い、その改善に文学研究者ならではの一定の役割を果たそうという意欲的な取り組みである。その背景には17世紀の植民地時代にまで遡れるノンフィクションによるネイチャーライティングの実績があり、またアメリカ特有の自然と人間との関係、自然観、自然環境がある。

「環境文学」の隆盛は、文学が社会の単なる反映ではなく、社会が孕む倫理的な問題に積極的にのかかわり社会全体の意識を刺激し、新たな意識を形成し、警鐘を鳴らし、社会的な課題の解決に文学ならではの役割を果たすことが可能であると考

える研究者が増えてきたことを物語っている。

ただし、「環境文学」は必ずしもこうした問題意識を全面に出した運動までを含む概念ではなく、むしろ自然描写や自然観についての研究対象におけるノンフィクション優位へのこだわりを解き放ち、小説などの創作をも取り込んだ幅広く緩やかな関係構築と捉えたい。

ところで、日本文学においてはどのような作品がそれに相当するのかの認識は、研究者間でも一般化されていないようである。日本には自然文学というジャンルがあり、また自然描写を大量に含む紀行文学という伝統的ジャンルもある。国木田独步、田山花袋などの名前がすぐに連想され、読み継がれてきた古典文学の中には日記と題された幾多の紀行文もある。

日本の文学・環境学会編による『たのしく読めるネイチャーライティング作品ガイド120』（ミネルヴァ書房）に取り上げられている日本の20作品には『おくの細道』『北越雪譜』『武蔵野』『注文の多い料理店』『複合汚染』『苦海浄土——わが水俣病』などがあげられている。自然を描くという点では俳句という文芸も無視することはできない。

3. 文学研究における余暇

『上野千鶴子が文学を社会学する』（上野千鶴子著、朝日新聞社、2000年）で著者は文学を「時代と状況の産物であり、それを産んだ時代の文脈と切り離せない。しかもたくさんの読者に読まれている。そう考えれば、文学作品は第一級の歴史・民俗資料と言ってよいが、これまで文学は作家主義と作品主義とに阻まれて、そういうふうには読まれてこなかった。とはいえ、歴史と文学、フィクションとノンフィクション、文学研究と文化研究のあいだの境界が揺らいでいる時代である。文学畑の研究の中からも、「まるで社会学みたいな」研究が次々に誕生している」と述べている。

かつて、『源氏物語』をテーマに「わが国古典文学に見る余暇・生活文化能力評価」（日本レジャー・レクリエーション学会第21回大会）をまと

めるなど、文学作品を手がかりにした余暇研究は筆者の積年の関心事である。仕事と余暇の関係は文学作品の中でどのように描かれているか。それは作品が書かれた時代や著者の世界観によって、また登場人物の造型によってどのような違いを見せるのだろうか。そして、ワーク・ライフ・バランス的な考え方は過去の文学作品の中に登場してはいないのだろうか。また、そうした視点で文学研究の側から作品を読み解く試みはどの程度なされているのであろうか。

多くの文学作品は究極的には人を描き生き方を問う。余暇は生活時間配分の最適化の問題であり、結局は生き方の問題に収斂する。ワーク・ライフ・バランスはライフスタイルの問題であるとともに、最適配分に向けてのあくなき模索を呼びかける一種のスローガンともいえる。従って、文学研究にもこうした余暇やワーク・ライフ・バランス的視点は成り立つはずであると考えられるが、余暇の視点からの文学研究は、具体的な遊びを取り上げその記号的意味を読み解く試み等は散見されるものの、生活時間配分や生活価値観を含むワーク・ライフ・バランス的な視点からの試みは少ないように思われる。

その中で突出した試みのひとつは『源氏物語』における遊びの研究であろう。いうまでもなく、『源氏物語』研究はわが国の文学研究の中で大きなウエイトを占め、精緻な分析がなされているが、『源氏物語』における遊び（管弦の遊びに限らず）の分析は、文学研究の側から文学を通して余暇というテーマに切り込んでいる例である。登場する遊びの種類、遊びの内容、遊びの担い手、場面・状況に果たす意味、そして、遊びそのものの意味など、実に多彩かつ詳細な研究が行われている。

(1) 『源氏物語』における囲碁

『国語と国文学』（至文堂）1998年11月号には、「碁を打つ女たち——『源氏物語』の性差と遊びわざ」（松井健児・駒澤大学教授）という論文が掲載されている。そこでは、“平安時代において囲碁という遊戯は、一般に男女ともに楽しまれたものであるといわれている。しかし男女ともに、

さらにはその年齢差や身分差を越えて楽しまれたということが、同時に、囲碁という遊戯に関わる、おのおのの集団の均質性までも意味していたとは思われない。…集団や人物間における、より個別的で特異な関係性の読み取りにおいても有効に働くのではないだろうか”との問題意識から、囲碁の登場場面を詳細に分析して、“男性主体によって構築された、時の規範文化にあらがう、対抗文化としての囲碁の可能性”を示唆し、“ひとびとの生活を彩る遊びわざの世界とは、たしかにこの物語の動的な展開のなかにあっては、ささやかな出来事にすぎないものであろう。しかし『源氏物語』は、囲碁という静寂な遊戯のなかにおいても、権力の介入や桎梏、さらにはそこからの逃亡をくわだてる者たちの動態を、鮮やかに刻み込んでいたのである”と結んでいる。

物語後段の女主人公浮舟が出家した後、“日常のなかで行なわれる、小野の妹尼との囲碁とは、囲碁それ自体の楽しみの世界なのであり、それ以上でもそれ以下でもない。…浮舟にとって、碁を打つことと経を読むことは、いわば等しい価値を持つものとして語られるのである。それは、どちらが上でどちらが下といったものではない。すべては浮舟の日常なのであり、生活のなかのすべてによって、みずからを確かめていく日々が浮舟に訪れようとしている”という論文著者の読み解きは、文学研究者の側からも昨今のワーク・ライフ・バランス観に通底するような視点が示されているようで、興味深い。

『枕草子』には、「つれづれ慰むるもの」の段の冒頭に碁と双六が登場するが、双六遊びの際の動作と囲碁の穏やかな所作とは対照的に語り分けられ、行動主体の人間評価につながっている。平安の貴族社会では、余暇に行なうありふれた遊びの選択さえ、時には大きな意味を持っていたのである。

こうした『源氏物語』における囲碁論は、文学研究の側から余暇に着目して文学作品を読み解く研究であり、「環境文学」に倣うならば、「余暇文学」という表現も可能ではないだろうか。

(2) 森鷗外『独逸日記』における本務と余暇

『国文学——解釈と鑑賞』（至文堂）2003年1月号の「鷗外 その出発」と題した連載（96回目）には「本務と余暇、そして出会い——『うたかたの記』をめぐる」（竹盛天雄・早稲田大学名誉教授）という興味深い論文が掲載されている。

この論文の前半は、森鷗外の『独逸日記』を通して、医学留学生鷗外と留学生を迎え入れる先住研究者たちとの交流と日常生活を、本務と余暇を縦糸と横糸のように巧みに交差させて織り上げた豊かな成果であると分析している。こうした視点は、まさにワーク・ライフ・バランス的分析である。

“…美しい風景にも案内しているが、これらの誘いは、研究者が、研究の余暇において日頃の集中や緊張から自分をどのように解放してゆくかの、オリエンテーションの一つといえなくもなかった。…ここに上げた日記記述は、いずれも研究室仲間との野遊び、研究室から誘い出されての体験、さらにはペッテンコーフェルその人の招待によって知る大学者の横顔という類のものであって、日々の研究状況を示す記録ではない。この日記の内容は、一方に本務とする研究生生活あるいは時間があって、その外縁というべき外枠をなすものであるが、逆にいえば、外縁・外枠の側から、中核というべき本務の進捗状況についての雰囲気やうかがわせる材料とってよいだろう。…本務と調和し折合っている余暇の生活と時間—これは、さまざまな制約を背負って生きる人間にとって、一つの夢というべき生の状態ではあるまいか。”

“鷗外の日記に材料を提供している交友もまた彼らの余暇のそれだったことをいわねばならないだろう。いわば、そこには、本国をはなれた旅行者固有の休憩時間にあるやすらいだ交友関係が成り立っていた。”

明治期における異国での若い留学生の“本務と調和し合っている余暇の生活と時間”を“一つの

夢というべき生の状態”とする論文著者の視線は、そのまま今日のワーク・ライフ・バランス的視点と重なり合っている。しかも、専門研究者ゆえの、作品世界に対する広く深い知識や理解に裏打ちされた読みは、強い説得力とインパクトを感じさせるものである。

4. 文学作品から探るワーク・ライフ・バランス的視点

上記の紹介は、文学研究者の読み取りにワーク・ライフ・バランス的視点を発見した例であるが、文学作品（小説）そのものにワーク・ライフ・バランス的文脈が登場していると読めるケースももちろんある。ただし、欧米先進国はいざ知らず、日本では当分実現見通しのない見果てぬ夢として語られるケースが少なくない。

文学作品における余暇の取り上げ方には、余暇活動や自由時間の過ごし方そのものを主要テーマとしているものと、作品の中で部分的断片的に余暇に言及しているものや、具体的な余暇活動に取り組む場面が登場するケースの2パターンがある。

後者については非常に多くの作品に登場していることが想像され、むしろ全く登場しない作品のほうがまれであろう。一方、前者についてはきわめて少数派である。

その題名ゆえに流行語にもなった『毎日が日曜日』にしても、“総合商社の特質とビジネスマンの（幸福な人生）とのかかわりを興味深く追求する長編小説”ではあるが、“総合商社の巨大な組織とダイナミックな機能、日本の体質と活動のすべてを商社マンとその家族の日常とともに圧倒的な現実感で描く”ものであり、経済小説、企業小説といったほうが読者には納得しやすいだろう。

さらに、小説における余暇については、具体的な余暇活動の魅力や取り組みを主テーマとしているものもある。特にスポーツをとりあげたものは多く、最近では、従来ノンフィクションの領域であった陸上競技や走ることなどの体感的魅力をテーマとした小説も注目されている。

スポーツ小説、ギャンブル小説、旅行文学、山

岳小説、海洋小説、ペット小説、冒険小説等々、さらにスポーツでも野球、テニス、サッカーなど具体的な余暇活動分類に沿うようなジャンル分けが可能なのにも思えるが、なかには余暇ではなく職業に近いようなかわり方の物語もあり、「余暇文学」の概念規定は容易ではない。「環境文学」同様、「余暇文学」も、社会全体の意識を刺激し、新たな意識を形成し、警鐘を鳴らし、社会的な課題の解決に文学ならではの役割を果たすことができる試みを中心に据えるなら、個別の余暇活動をテーマにしたものは、広義の「余暇文学」ではあるものの、中核ではないと考えられる。

ここでは、企業社会で働く大人たちがつかの間もらず余暇観からワーク・ライフ・バランス的意識を探ってみたい。

(1) 『絹と明察』三島由紀夫、講談社、1964年

零細な紡績会社を家族主義的经营で一躍大企業に成長させた社長駒沢善次郎を主人公にした三島由紀夫の長編小説『絹と明察』は1964年10月に講談社から刊行された。

物語の舞台は1953年の関西。実際の労働争議に取材して書かれたもので、西洋的知的合理主義と家族主義に代表されるような日本的心情とを交錯させつつ、高度経済成長にひた走る日本の企業社会を描いている。

過酷な労働条件下で働く青年たちの最大の目的は労働条件の緩和であり、“明るくたのしく働けるモデル工場になる”ことこそ夢の実現であって、仕事と生活の調和など、意識の外である。しかし、そんな物語のなかに1ヵ所だけ、ワーク・ライフ・バランス的記述がある。著者はそれを青年の側の心情としてではなく、社長駒沢善次郎の述懐として描いている。

“ヨーロッパの五月は百花繚乱どすなあ。どこの公園も花が咲き競うて、その間を子供連れの夫婦が悠々と散歩してる姿なんだ、旅人の目には、何やらこう、涙のにじんで来るようなええ景色やおまへんか。わしはつくづく日本のことを考えて、日本もいずれはこうならなあかん、

今はあくせく働らいてばっかりいるけれど、いずれはこないな悠々たる生活を愉しむようにならなあかん。”

そこで、社長のとる行動は悠々できるよう労働条件を緩和することではなく、各国の美しい花の種を女子工員たちに蒔かせ工場の庭じゅうに花を咲かせてせめてヨーロッパの生活を偲んでもらうことであった。

“みんなさぞ喜んでいまっしゃろ。それが又、生産の励みにもなるこってすし”と心底自らの行動を肯定するのである。

(2) 『官僚たちの夏』城山三郎、新潮社、1975年

1960年代初頭の日本社会。経済・産業政策をリードする通商産業省のキャリア官僚たちが、どのような哲学や思想を持って国家の職務にまい進していたかを鮮明に描く人間ドラマとして、評価の高い作品である。

大きな時代のうねりの中で、予想以上の経済成長は、通産省や官僚たちの役割を変え、人を変え、働き方を変えていく。

遅いと言えば午前2時3時のことで、午後7時の退庁など桁外れの早さであり、極度の過労おして家庭も顧みず働くことが当然視されている通産省で、主人公風越信吾は、土曜日正午前の執務時間中にもかかわらず、テニスに興じる若手官僚片山の姿を見かけて驚く。“余力を温存しておくような生き方は、好まん。男はいつでも、仕事に全力を出して生きるべきなんだ”と考える風越だが、女性職員たちは“「余裕があるのよ。そうでなくちゃ、これからはだめねえ」「いつかはきっと、ああいう人たちの時代になるわよ）」とエールを送っている。

海外赴任から帰国した片山に著者は、“「簡単というなら、わたしたちははたらきすぎですよ。日本全体が働きすぎなら、通産省も働きすぎ。ワカホリックの患者ばかりですよ。向こうでは、四時か五時には仕事を終り、家へ帰ってゆっくり一服してから、婦人同伴で観劇やパーティへ。毎日

まことに優雅なものです。ああした西欧的な生活様式を、人間として失いたくないと思いましたね」…「ここは、みなさん、働きすぎですね。そろって顔色がよくない。もっと休みをとって、遊ばなくちゃ」と言わせている。

一時退官を決意した片山は、“これまでの勉強を活かし、そこでひとつ理想的な経営をやりたい。週休二日制や長期の有給休暇も設ける。安くて良い紙をつくり、多くの従業員とその家族にゆとりのある生活を与えてみたい。…人材不足に悩む中堅企業に出て、自分ものばし、企業ものばす。そこに新しい生きがいを見出したい、と答えた。…これからはむしろ、官僚も含めた国民全体が、気楽に、のびやかに、生活をたのしみながら働く時代へ入っていくべきではないか。片山自身は、テニスも、ヨットも、ゴルフも、ブリッジも、マージャンも、どのあそびもやめる気はなかった。だれにも気がねせず、自由に遊び、自由に働きたい。天下国家をとるより、のびやかさをとりたいたい——。”

やがて日本社会は、そういう片山的な生き方の時代へと大きく舵をきるのだが、現実には、いまなおワーク・ライフ・バランスが目指すべき方向を示すキーワードとして機能している状況なのである。

(3) 『毎日が日曜日』城山三郎、新潮社、1976年

言うまでもない。これこそ、連載と同時に大きな話題となり流行語にもなった小説である。この言葉は今では、定年退職後の生活をさすフレーズとしてすっかり定着しているが、もともとの“毎日が日曜日”は、定年後の生活だけでなく、現役でありながら社内で不本意な閑職に追いやられたようなビジネスマンの日常的な仕事生活をもさしていた。

立場や考えの異なる登場人物の誰もが、それぞれに悩みながら懸命に生きようと精一杯の試行錯誤を繰り返している、そのけなげなまでの生き方がなつかしさを伴って伝わってきて、思わず、我が身を振り返らずにはいられない気にさせられる。

実態はともかくとして、一般用語としてはリストラなど存在せず、ましてや身近なボランティアで退職後の生きがい創造などという発想すらなかった時代に書かれた小説が、団塊世代の大量退職を目前にした現代社会の問題と微妙に重なり合って、さまざまに物を思わせてくれるのである。

主要な登場人物のひとりである笹上は言う。

“アメリカでいちばんショックだったのは、向こうの連中が、定年をむしろ、よろこんでたことだな。…向こうでは、ハッピー・リタイアメント、つまり、定年おめでとう、定年バンザイなんだな。…日本ではいつになったらそんな日が来る。永久にそんな日は来ないかも知れん。それなら、おれひとりだけでも、定年バンザイといえる人間になってやろうと思った。…二十年間、おれは定年後の設計のことばかり考え、ひと知れず、心がけ、努力してきた。”

その結果、定年後は“ただ、のんきに、たのしく、ふわりふわり生きていく”つもりで笹上は、“無為にして怠惰な生活”により“気ままで長生き”な人生を得る予定でいたのだが、いざその立場になってみると、両者は必ずしも直結しないことを実感する。そして、“気ままで長生き”するには、少しばかり内容があり、働きがいのある生活、軽く支えになるようなもの、軽く頼りにされるようなこと、完全な空白ではなく多くの空白のなかに適当に楽しい予定が少し加わっているような日程が必要だと思い至る。まさにワーク・ライフ・バランスの重要性である。

そんな折、笹上はかつての同僚の息子の療養に遭遇し、話し相手兼ちょっとした看病という格好の機会を得ることになる。“気軽だし、程よく性に合っている。好奇心まじりの助っ人であり続けたい”と、いつのまにか、その助っ人的立場に固執し始める。今日の用語で言うなら、チョイボラであり、「社会性余暇」的考え方である。

(4) 『柏木誠治の生活』 清水義範, 岩波書店,
1991 年

“フツターのサラリーマンの物語”と副題があるが、内容はフツターに生きることのむずかしさと、それでもフツターに生きるためにけなげにがんばる物語である。

第1章「普通の1日」に次いで、第2章は「休日」である。“休みにゴルフの予定が入っていないと、金曜日の夜など、眼前の2日間の休みにたじろぎ、ため息をついてしまったりする彼であった。楽しむことの手先な世代なのである。柏木誠治には趣味らしい趣味がなかった。…要するに、柏木は休日の過ごし方に関してはほとんど無策なのである。家でごろごろしているしかしょうがなく、自分でも情けないと思うくらいである。だが、休みはやってくる。”

第6章は「普通の人生」。母親の面倒を誰が見るか、疎遠になった息子との会話の糸口探しという、高齢社会のミドルビジネスマンにはもっともありふれた話が身につまされるようなさりげなさで展開される。

柏木誠治は考える。

“サラリーマンであることをやめない限り、仕事というものはエンドレスである。…そして、仕事だけでなく、生活というものも、生きている限りエンドレスだ。どこまで行っても、何やかや生きていく上での問題が尽きることはない。”そして、“だが柏木誠治は、まだ戦意を失ってはいなかった。仕事も、家庭生活も、きっちりやってみせると意気込んでいるのだ。”

まとめにかえて

取り上げた前項の4作品は、ワーク・ライフ・バランスが日本のサラリーマン社会にあってはいつの時代にも働く大人たちの関心事であり、見果てぬ夢であることを伺わせる。そして、ワーク・ライフ・バランス的生活への気づきがいずれも欧米先進国体験により誘発されていることが特徴的である。日本に比べ、欧米は仕事と生活の調和が

実現されていると登場人物に繰り返し語らせているということは、とりもなおさず、著者たち自身の認識の証であろう。

ところで、今回取り上げた作品ではいずれも働く大人の主人公は男性であった。ワーク・ライフ・バランスの出自を考えれば、女性を主人公とする作品にも今後着目する必要があるだろう。

『上野千鶴子が文学を社会学する』では、『黄落』（佐江衆一、新潮社、1995年）や『恍惚の人』（有吉佐和子、新潮社、1972年）を取り上げ、老人文学とは異なる“老人介護文学”という新たなジャンルに言及している。『黄落』の主な介護者はシニア男性、そして『恍惚の人』では正規の職業を持たない主婦であり、働く女性は介護を他の人に任せたりプロに依頼することが多く、この書が刊行された頃は、専門職女性は主たる介護者になる可能性が低いと見られていたようである。

しかし、近年は、仕事を持つ女性たち自身が介護体験を文章化するケースが多発している。フィクション・小説よりも、なまの体験を公表したノンフィクションが圧倒的に多く、インターネットのホームページやブログも多数存在する。話題になるような著述を著す人は、もともと専門性の高い職業に従事し各分野で活躍している人が多く、ワークとライフの調和を目指す試行錯誤や工夫が一般の介護従事者や働く女性たちの共感を呼ぶようだ。これからの女性のワーク・ライフ・バランスには、草創期の育児支援に替わって、ワークにもライフにもなり得る介護とのバランスが深刻になるかもしれない。超高齢社会では、女性のワーク・ライフ・バランスは、育児のみならず、介護や自己実現機会とのバランスがいっそう重要になってくることだろう。

ワーク・ライフ・バランスは、仕事優先のライフスタイルを見直し、他の生活領域との調和を図ることを可能にする働き方の具体的な提案が眼目である。改革には、生活価値観・ライフスタイル・社会システム3者の歩を揃えた歩みが必要と考えるが、文学作品からは、とりわけ生活価値観とライフスタイルに関して多くの示唆を汲み取ることができるであろう。

取り上げた作品には、仕事と生活の調和を憧憬しつつ働く企業戦士たちが、バランス獲得のために個人的な工夫で努める姿が描かれており、多くの読者の支持を得た小説ならではの魅力あふれる物語展開と確かな人物描写のおかげで、その時代その社会の余暇観が鮮やかに立ち上がっている。ここで取り上げたわずかのケースからだけでも、文学研究者による余暇の視点、そして文学作品における余暇描写は、ともに余暇研究にも大きな示唆を与えるものであることが伺われる結果となった。「余暇文学」の可能性に期待したい。

参考文献

上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社、2000年

厚生労働省『労働経済白書』2007年
 清水義範『柏木誠治の生活』岩波書店、1991年
 ジョフリ・デュマズディエ、寿里茂監訳『レジャー社会学』社会思想社、1981年
 城山三郎『毎日が日曜日』新潮社、1975年
 城山三郎『官僚たちの夏』新潮文庫、1980年
 スコット・スロヴィック、野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉を読む——ネイチャーライティングの世界へ』ミネルヴァ書房、1996年
 総務省『高齢社会白書』2007年
 内閣府『男女共同参画白書』2007年
 パク・ジョアン・スックチャ『会社人間が会社をつぶす——ワーク・ライフ・バランスの提案』朝日新聞社、2002年
 文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』ミネルヴァ書房、2000年
 三島由紀夫『絹と明察』新潮文庫、1987年
 『国語と国文学』至文堂、1998年11月号
 『国文学——解釈と鑑賞』至文堂、2003年1月号